

科学研究費助成事業(基盤研究(S))公表用資料 [研究進捗評価用]

平成22年度採択分
平成25年4月10日現在

アナトリアに於ける先史時代の『文化編年の構築』

Reconstruction of Cultural Chronology in
Prehistoric Anatolia

大村 幸弘 (OMURA SACHIHIRO)

(財)中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・所長



研究の概要

考古学の基本は『層序』であり、それを基に構築される『文化編年』である。当該研究では、カマン・カレホユック遺跡の前3千年紀～前7千年紀、前期青銅器時代から新石器時代までの『文化編年』を構築することに主目的をおく。この遺跡の先史時代の『文化編年』を構築することにより、先史時代に於いて古代中近東世界で東西、南北のほぼ中央部に位置するアナトリアが文化的にどのような役割を演じていたのかを解明したい。

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 史学・考古学

キーワード： アナトリア 文化編年

1. 研究開始当初の背景

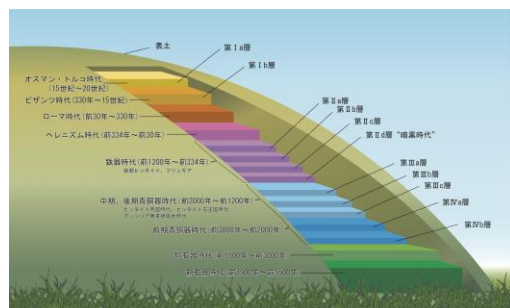
当該研究の目的は、中央アナトリアのほぼ中央部に位置しているカマン・カレホユック遺跡の発掘調査(1985年考古学的予備調査、1986年から本格的考古学的発掘調査)を通して、『文化編年の構築』を試みるものであり、それを基に東西文明の狭間に位置しているアナトリア(小アジア)が、歴史的、文化的にどのような役割を演じたかを解明するところにある。特に、この研究を遂行する上で一つの遺跡を通して行うことに極めて重要な意味があると考えている。

これまでの中近東世界の考古学的発掘調査でも、『文化編年』の構築は行われてきているものの、それらの多くは19世紀末から20世紀半ばにかけて作成されたものが多く、現在の考古学の状況から鑑みるとかなりの修正を加える必要性が出てきている。

『文化編年』の構築には、遺物が一体何処の建築遺構内から出土したのか、どの層序から確認されたかが極めて重要な意味を持ってくるが、20世紀半ばから21世紀にかけてのアナトリアでの発掘調査では、それまで構築された既存の『文化編年』を一つの基準として進められてきた。

カマン・カレホユック遺跡の発掘調査を開始した背景には、こうした従来の尺度よってアナトリア各地で構築されてきた「修復を必要とする既存の文化編年」の存在があり、故にそこに再考察を加え、中央アナトリアの中

央部で層序、断面に重点を置きながら新たな『文化編年』を再構築することを目的とした。



カマン・カレホユックの文化編年

2. 研究の目的

当該研究の主目的は、トルコ共和国の93%の面積を占め、東西文明の接点にあるアナトリア高原が、歴史的、文化的にどのような役割を演じてきたか、これを解明する基礎となる『文化編年』の構築を行うことである。その目的を完遂するために中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所は、アナトリア高原のほぼ中央部に位置するカマン・カレホユック遺跡で今日に至るまで考古学的発掘調査を継続して行なっている。

当該研究では、研究期間内に以下の6点を明確にしたいと考えている。

- 1) 前期青銅器時代は何期に分かれるのか
- 2) 銅石器時代と前期青銅器時代との分岐点を何処に置くのか。

- 3) 銅石器時代は何期に分かれるのか。
- 4) 新石器時代と銅石器時代との分岐点を何処に置くのか。
- 5) 新石器時代は何期に分かれるのか。
- 6) 無土器新石器時代は存在するのか。

これらの何れの問題点もアナトリア考古学の中で依然として論争されているものばかりであり、当該研究でカマン・カレホユック発掘調査を通して解明の糸口を提起したいと考えている。

3. 研究の方法

当該研究は、カマン・カレホユック遺跡の発掘調査を中心に置き、重層した文化層を上層から下層へ掘り下げるのを一つの基本とする。研究対象となる発掘区は、これまでオスマン時代から前期青銅器時代末期までの『文化編年』を構築した北区であり、現在10mx10mの発掘区が34設定されている。

研究期間中、先史時代の堆積層を、毎年約1mずつ掘り下げ、そこから検出される遺構、遺物を整理し先史時代の『文化編年』の構築を行なう。また、発掘作業を進めることによ



り発掘区に現れる断面の層序を精査し、図面におこす作業には力を入れたい。

なお当該研究は、研究代表者である大村が総括を行ない、研究所の研究員および外部からの研究者、そして現地作業員により遂行する。

4. これまでの成果

アナトリアの先史時代の『文化編年』は、曖昧な形で放置され、確立されてこなかった。このような現状を鑑みると、カマン・カレホユックで現在構築されつつある先史時代の『文化編年』はアナトリアの先史時代の研究に大きく寄与するものであると考える。

2012年9月にアナトリア考古学研究所の主催で先史時代、特に前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけての年代付けに関するワークショップを開催した。このワークショップには、現在、アナトリアの先史時代の調査に関わっている主な研究者が集まり、二日間に渡って討論を重ねたが、カマン・カレホユックで構築している先史時代の『文化編年』に関する情報の提供依頼が多々あった。これは、

- 1) 当遺跡の発掘調査が同じ発掘の方法で長期間にわたって進められてきていること
- 2) 層序、断面図作成に重点を置いてきていること
- 3) 炭素年代測定を広く活用していること
- 4) 考古学以外の研究者などを含めた学際的研究を行っていること

などを高く評価して頂いた結果と言える。当該研究は、今後のアナトリア考古学、中近東考古学の先史時代研究に多大な影響を与えるものと確信している。

5. 今後の計画

『文化編年』を構築している発掘区である北区を掘り下げながら、その両サイドにある東西の発掘区を発掘し、再検証を行なう。この作業が当該研究では必要不可欠のものであると同時に、極めて時間を要するものである。

そのような状況を鑑みつつ、研究期間が終了するまでの間に、下記のことを行ないたいと考えている。

- 1) 第IIIc層出土遺物の整理
 - 2) 第IVa層出土土器の精査と、後期青銅器時代の解明
 - 3) 第IVb層-前期青銅器時代の建築面の検出と出土する金属製品の分析
 - 4) 第V層—銅石器時代の文化圏の広がり確認
 - 5) 第VI層—新石器時代の層位の発掘
- 当該研究の骨格ともなる層序を中心とする『文化編年』の構築を今後とも進めて行きたい。

6. これまでの発表論文等 (受賞等も含む) 大村幸弘

・「カマン・カレホユック(トルコ共和国)に於ける『文化編年の構築』と火災層」『東方學』第百二十二輯、東方學會、119-130頁(2011)

・“Kaman-Kalehöyük Excavation in Central Anatolia”, S. R. Teadman and G. McMahon (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia*, pp.1095-1111 (2011)

・“2010 Yılı Kaman-Kalehöyük Kazıları”, *32 Kazı Sonuçları Toplantısı* 4.Cilt, Ankara, pp.447-462 (2012)

・“2009 Yılı Kaman-Kalehöyük Kazıları”, *32 Kazı Sonuçları Toplantısı* 4.Cilt, Ankara, pp.421-426 (2011)

ホームページ等

http://www.jiaa-kaman.org/jp/excavation_kalehyuk.html